

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02358

研究課題名(和文)第二言語習得研究成果を活用したより効果的な英語指導法の開発

研究課題名(英文) Development of efficient teaching method of English based on the results of SLA research

研究代表者

白畑 知彦 (Shirahata, Tomohiko)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：50206299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：英語学習者(JLEs)が、どのように主語wh疑問文を習得していくのか考察した。統語的視点と意味的視点から、なぜ主語wh疑問文の習得が他のwh疑問文の習得よりも困難か、なぜ主語what疑問文が最も習得困難なwh疑問文か、実験結果を基に説明を行った。実験の結果、初級JLEsは、日本語の統語的な特性と意味的な特性の両方からの影響を強く受ける。中級学習者はDO(YOU)が過剰挿入された文を適切であると判断するようになる。主語wh疑問文の習得が進んでくると、彼らはFocus句とForce句は異なった状況で使われていることに次第に理解できるようになり、適切な主語wh疑問文を許容するようになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本語を母語とする者が、どのように第二言語としての英語を身につけていくのかというテーマを土台とした第二言語の習得研究である。第二言語としての英語習得の過程を明らかにすることで得られた研究成果は、英語教育に応用できる点が多々ある。本研究成果も日本の英語教育に貢献できる点が多々ある。発達過程を明らかにしたことだけでなく、本研究で取り組んできた、明示的指導の有効性と限界、誤り訂正の有効性と限界なども本研究のテーマであったが、その研究成果を英語教育に応用できるものと考えている。

研究成果の概要(英文)：The study explains how Japanese learners of English (JLEs) develop their knowledge of (short-distance) subject wh-questions in English. This study attempts to explain why subject wh-questions (subject who- and what-questions) are difficult for JLEs. Participants were 45 first year university students in Japan. The results indicate that JLEs at the initial stage are syntactically and semantically influenced by L1 Japanese properties. Then, at the intermediate stage, they overuse DO (YOU). With the progress of JLEs' acquisition of subject wh-questions, they gradually come to realize that Focus and Force Phrases are used in disjunctive environments, resulting in the correct use of subject wh-questions.

研究分野：第二言語習得研究

キーワード：第二言語習得 英語教育 第二言語の発達過程 明示的指導 誤り訂正 wh疑問文 文法習得

1. 研究開始当初の背景

日本の英語教育における明示的学習の効果、および明示的指導の役割について考察することが、本研究課題の研究開始当初からの目的である。具体的には、第二言語習得に関する、下の(1)に掲げる5つの問いについて考察していった。

- (1) a. 文法を体系的に「すべて」教えるべきか？
- b. そもそも、文法は「教える」べきなのか？
- c. 教師が文法を教えれば、学習者は習得するのか？
- d. 文法の誤りは教師が指摘すればすぐに直るのか？
- e. もし誤りを訂正するなら、どの程度の細かさで訂正すべきか？

2. 研究の目的

第二言語習得における明示的学習とは、学習者が受け取る第二言語インプットを脳内で意識的に処理する活動である。インプットされた言語情報に、なんらかの規則性があるかどうかを学習者自らが判断し、もしそこに規則性があると考えれば、その規則性は具体的にはどのようなものなのかを明確にしていく。一方、暗示的学習には、そのような意図性はなく、入力される言語情報に対して、ほぼ無意識に規則を見出していくインプット処理である。第二言語習得での明示的、そして暗示的処理や学習に関し、大きく分けて(2)にあげる3つ立場があり、現在でも研究者の間で意見の一致を見ない。それぞれの立場の提唱者・支持者とその論拠をまとめると次のようになる。これらについて考察する。

(2) 第二言語習得における明示的学習と暗示的学習に関する主張

- a. 第二言語習得は、大部分またはそのすべてが暗示的に行われる。
- b. 第二言語習得は、大部分またはそのすべてが明示的に行われる。
- c. 第二言語習得では、暗示的学習と明示的学習の両方が使われる。

3. 研究の方法

第二言語習得の大部分が暗示的に行われるという立場を支持する研究者の代表に Krashen (1982 他) がいる。彼は、多くの著書の中で、第二言語習得はほとんど暗示的に行われると繰り返し述べている。1980年代を中心とするこの Krashen の主張(総称して、モニター理論などと呼ばれる)を、現在では当時のままの形で支持する研究者はほとんどいないと言ってよい。しかし、Krashen とは異なるさまざまな理論的アプローチに基づいて、「第二言語習得のほとんどは暗示的に行われる」と主張する研究者は現在でも少なからずいることは確かである。生得的な言語獲得能力として仮定されている普遍文法(UG)を理論の枠組みとする第二言語習得の研究者たちは、第二言語学習者の潜在的言語能力は、学習者へインプットされた言語データと、普遍文法を構成する原理およびそれに付随するパラメーターの相互作用の結果であり、そのため、少なくとも普遍文法に関わる文法領域の習得は、母語獲得のみならず第二言語習得であっても、暗示的な要因が強いと主張する。加えて、インプットとUGの相互作用は、ほぼ無意識のうちに行われており、そのため学習者の意識の届かないところで第二言語習得が進むのだと、この領域の研究者たちは考える(White, 2003)。

どの第二言語習得理論の立場に立とうが、明示的学習を完全に否定することは、いささか極端

すぎる主張であると考え。特に、教師の教える教室での第二言語習得の場合は否定することは難しいであろう。暗示的学習を支持する研究者の主張を大まかに一般化すれば、「第二言語習得では、暗示的学習が主要な、または基本となる役割を果たしており、明示的学習の役割が仮にあるとしても、その役割は二次的または補完的なものに過ぎない」ということになる。

第二言語習得において、明示的学習と暗示的学習の両方が使用されると主張する立場は、さらに大きく2つに下位区分できる。1つ目のグループは、「スキル理論」を支持するグループの考え方である。スキル理論は、基本的には言語習得に特化した理論ではなく、一般的な学習理論である。すなわち、成人はたいてい明示的に物事を学習する。そして、繰り返し練習し、その学習対象物に一定期間接触することで、それらが暗示的に処理できるものへと移行していくと考える理論である。この理論に基づけば、言語を含む人間の発達とは、意識的に学習した宣言的知識と、その後続く自動化した手続的知識の両者の使用が関係していることになる。宣言的知識の使用には、明示的な学習とその処理が関わっている。学習者はまず明示的に当該規則に接触し、その規則がどのような性質のものか意識的に気づくことが必要となる。この知識のことを宣言的知識と呼ぶ。そして、宣言的知識を繰り返し使用することにより、手続的知識として蓄積することを「手続化」という。すなわち、あるスキルを学習する際、そのしきみを「知っている」段階から、それを何度も使用することによって、いちいち考えずに「使用できる」ようになることを言う。言語学習をスキル学習の一種だと考えるならば、このような過程が教室での第二言語習得においても観察されることになる。手続的知識の自動化には、暗示的な学習とその処理が関係してくる。学習者は明示的に身につけた知識を徐々に無意識に使い始め、その後、さらに状況に適した使用を通して、相手への反応が自然に出るようになっていくことを手続的知識の自動化と呼ぶ(DeKeyser, 2007)。

次に、2つ目のグループの立場は、スキル理論や特定の学習理論を支持しているわけではないが、暗示的な処理と明示的な処理(または学習)の両方が第二言語習得には働いていると考えるグループである。例えば Schmidt(2001 他)はその1人であるが、言語習得が行われるには、言語インプットが学習者に与えられた段階で、彼らはその中にある言語的特性を認識しなければならない、つまり規則に気づかなければならないと主張する。この「気づき仮説」では、習得が首尾良く遂行できるためには、学習者はインプットに注意を向け、言語的特性に意識的に気づくことがまず必要であると主張する。その後、必要とされるすべての特性を身につけると述べている。

4. 研究成果

以上、第二言語習得における明示的学習と暗示的学習の役割についての研究成果を簡潔にまとめた。自説を交えて要約すれば次のようになる。第二言語の多くの領域の習得は、おそらく暗示的におこなわれ、それには当然、暗示的学習が関与している。しかし、それは、学習者、特に教室で学ぶ中学生以降の学習者が、明示的な学習方法でまったく第二言語習得を行っていないと言っているわけではない。おそらく、学習者が身につけるべき言語知識・言語項目は2種類に分けられるのではないだろうか。1種類目は、その規則がどのような規則なのかを教師が明示的に教えられるものである。言い換えれば、規則の説明が容易なものである。2種類目は、教師が説明するには当該言語規則の中身が複雑すぎて、結局のところ、説明が不十分になり、学習者は十分に理解できず、明示的には学習しにくい種類のものである。したがって、本研究成果として、ここでは以下の諸仮説を提案したい。

- (3) 明示的な文法指導、誤り訂正が効果的で、その後、暗示的に習得が進む可能性のある項目
- a. 規則の内部構造が単純な項目
 - b. 語彙的意味の伝達が主となる項目
 - c. 日本語（母語）に同じか類似した概念・構造が存在する項目

一方で、明示的な文法指導、誤り訂正が効果的ではない項目、言い換えれば、暗示的には習得が難しそうな項目の特徴は次のとおりである。

- (4) 明示的な文法指導、誤り訂正をおこなっても効果がなく、明示的に習得するのが比較的困難な項目
- a. 規則の内部構造が複雑な項目
 - b. 文法的機能の伝達が主となる項目
 - c. 日本語（母語）に同じか類似した概念・構造が存在しない項目

以上の仮説を踏まえれば、文法の具体的指導方法は、次のように、さらに下位分類できる。

- (5) 教師からの説明は軽くて良く、誤り自体も一時的である項目
- a. 語順（SV、SVC、SVO、SVOC、SVOO）
 - b. be 動詞の活用形（I am thirteen years old. John is from Canada.）
 - c. 代名詞の格変化（I, my, me, he, his, him）
 - d. 主語の非脱落（*is my sister. *went to Kyoto.）
 - e. wh 疑問文での wh 語の位置（*Did John go to where? *You like what?）
 - f. 可算名詞の複数形（pens, desks, trees, watches）
 - g. 接続詞（when, if, though）
 - h. 分詞の形容詞的用法（A man standing near the door, the car made in France）
- (6) 教師からの説明は軽くて良いが、比較的長期間誤りの続く項目
- a. 三人称単数現在形-s（John looks happy.）
 - b. 不定冠詞（This is a watch.）
 - c. 一般動詞の過去形（特に、規則変化形）（Mary visited Kyoto last week.）
 - d. wh 疑問文での助動詞 do/did/does（What did you eat this morning?）
 - e. 受動態の助動詞（Mary was hit by John.）
 - f. 比較表現（中学校で学習する範囲）（-er than と more than）
- (7) 明示的に説明してもすぐには習得できない項目（習得が困難な項目）
- a. 定冠詞（the dog, the man）
 - b. 不可算名詞の複数表現（例：fire か fires か、light か lights か）
 - c. 前置詞一般（例：at, on, in, for, to）
- (8) 明示的に概念を確実に教えるべき項目（習得が困難な項目）
- a. 現在完了形（例：I have finished my homework.）
 - b. 仮定法（例：It's time you went to bed. John eats as if he were a pig.）

- c. to 不定詞 (例: I went to Hokkaido to meet my brother.)
- d. 関係代名詞節 (例: The man who called me last night was shot.)

明示的にでも学習が困難となる複雑な文法規則(例: 冠詞や名詞の複数形概念)も、ある程度、暗示的に習得が可能であると思われる。さらに、我々の身につける言語能力は、ある言語ではどのような表現や形式が許されないのかということ判断できる能力とも関係している。たとえば、英語を第二言語とする学習者が wh 疑問文の構造について学ぼうとしている時、その学習者は明示的に疑問文の作り方を学んでいると思うかもしれない。英語では文頭に wh 語を置かなければならないという規則は、ごく簡単に学ぶこともできるし、また言語インプットの中にもその実例を容易に見つけることもできる。しかし、たとえば、第二言語学習者は、よく目にする Who did John see? (ジョンは誰を見ましたか?) といった基本構造の理解以上のことを理解できるようになることが、さまざまな研究結果から繰り返し主張されてきている。要するに、先行研究では、第二言語学習者が、Who did John believe that Mary saw? (メアリが誰を見たか?) は正しい英文であるが、*Who did John meet Mary who saw? は誤りであると判断できるようになることを報告しているのである (White, 2003)。つまり、(英語を学習する日本語話者や中国語話者のように) 母語に wh 移動がない学習者が、どのようにこの wh 疑問文が文法的に誤りであるという知識を身につけることができたのか、インプットの影響に基づく説明だけでは解決できない。

一般的に、第二言語学習者は、授業中に教師から wh 移動の制約に関する規則を教えられることはないため、その規則を他者から明示的に学習しているのではない。さらに、非文法的な文は学習者が受け取る言語インプットの中には存在しないという事実がある。つまり、教科書には正しい文しか掲載されていない。したがって、学習者は、第二言語インプットから wh 移動に関する制約(つまり、規則)のすべてを明示的に学べるわけではない。それでは、wh 疑問文の制約が身につけられた学習者は、その知識をどのように身につけられたのであろうか。これまでの第二言語習得研究で、学習者は言語インプットとして取り込む情報よりも多くのことを理解できるようになると報告されている (White, 2003)。多くの研究者は、このような言語知識は、周りから与えられるデータ、つまりインプットと普遍文法の相互作用の結果であると結論づける。普遍文法は、「気づき」とは別の次元で働き、暗示的学習のみが関係する。したがって、普遍文法とインプット・データの相互作用の結果である言語のさまざまな側面(それらは言語知識のかんりの部分を占める)は、暗示的に身につくはずだと考えることができる。

しかし、このような立場に立ったとしても、依然として明示的学習の有効性を完全に否定することは難しい。特に中学生以上の成人学習者は、動詞や名詞の語尾変化、その他のさまざまな文法規則、そして「正しい表現方法」とされる言い方などを教師や参考書などから積極的に学んでいることは事実であり、成人学習者は意識的に第二言語を学んでいる部分はあるからである。一方で、普遍文法とインプットから取り込まれる言語データが相互作用するとき、明示的学習がいったいどのような役目を果たすのか(または全く役割を果たさないのか) 依然として判明されていないのも確かである。とは言え、基本的には、普遍文法に関わる諸原理の習得には明示的学習は影響を与えないと言える。一方で、普遍文法に関係しない言語習得の領域において、教師からの明示的指導により、学習者の中間言語に何かしらの良い影響が見られる場合もあるため、明示的学習に全く意味がないとも言えない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Shirahata, T., Yokota, H., Suda, K., Kondo, T. & Ogawa, M.	4. 巻 -
2. 論文標題 The acquisition of Wh-questions by Japanese learners of English: Focusing on subject Wh-questions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2018 International Conference on Bilingual learning and Teaching (ICBLT): E-proceedings	6. 最初と最後の頁 153-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kodama, K. & Shirahata, T.	4. 巻 8
2. 論文標題 Optimizing Second Language Vocabulary Learning with English Word Tests	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共同教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kondo, T., Shirahata, T., Suda, K., Ogawa, M. & Yokota, H.	4. 巻 31
2. 論文標題 Effects of explicit instruction on intransitive and transitive verbs in L2 English: with a special focus on non-instructed verbs	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ARELE	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白畑知彦	4. 巻 50
2. 論文標題 外国語の文法学習における明示的学習・指導の役割を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究紀要（教科教育学部篇）	6. 最初と最後の頁 120-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白畑知彦	4. 巻 48
2. 論文標題 理論言語学の研究成果を英語教授法に応用する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会	6. 最初と最後の頁 243-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shirahata, T., Kondo, T., Suda, K., Otaki, A., Ogawa, M., Yokota, H.	4. 巻 30
2. 論文標題 The learning and teaching of inanimate subjects	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ARELE	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大瀧綾乃、白畑知彦	4. 巻 Vol. 6
2. 論文標題 英語能格動詞の構造に関する明示的文法指導の効果	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白畑知彦	4. 巻 Vol. 3
2. 論文標題 英語の文法指導、語彙指導を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 KELES Journal	6. 最初と最後の頁 54-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Ayano OTAKI, Tomohiko SHIRAHATA, Takako KONDO, Koji SUDA, Mutsumi OGAWA & Hideki YOKOTA
2. 発表標題 Effects of Animacy in Second Language Acquisition
3. 学会等名 Japan Second Language Association (J-SLA)2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白畑知彦
2. 発表標題 どんな時に日本語での指導が必要になるか
3. 学会等名 英語教育総合学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogawa, M., Shirahata, T., Suda, K., & Kondo, T. & Yokot, H.
2. 発表標題 A COMPARISON OF TWO APPROACHES TO TEACHING COUNT AND MASS NOUNS: A NOUN CLASSIFICATION AND A COGNITIVE LINGUISTIC APPROACH
3. 学会等名 中部地区英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogawa, M., Shirahata, T., Yokota, H., Suda, K. & Kondo, T.
2. 発表標題 Language Proficiency and Instructional Effects: ACognitive Linguistic Approach to the Count-Mass Distinction
3. 学会等名 ICLC 15 (International Cognitive Linguistic Conference)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Mutsumi Ogawa, Tomohiko Shirahata, Koji Suda, Takako Kondo & Hideki Yokota.
2 . 発表標題 Long-term effects of explicit instruction on the count-mass distinction in English: A cognitive linguistic approach
3 . 学会等名 全国英語教育学会
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Kondo, T., Shirahata, T., Suda, K., Ogawa, M. & Yokota, H.
2 . 発表標題 Effects of explicit instruction on intransitive and transitive verbs in L2 English
3 . 学会等名 全国英語教育学会
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Ogawa, M., Shirahata, T., Suda, K., Kondo, T., Yokota, H.
2 . 発表標題 The effect of instruction on recognition of noun countability
3 . 学会等名 III International Conference on Teaching Grammar (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Shirahata, T., Kondo, T., Ogawa, M., Suda, K., Yokota, H., Otaki, A.
2 . 発表標題 The acquisition of inanimate subject by Japanese learners of English
3 . 学会等名 ALAA (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Kondo, T., Shirahata, T., Suda, K., Ogawa, M., Yokota, H.
2. 発表標題 Effect of explicit instruction on unaccusative verbs
3. 学会等名 ALAA (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shirahata, T., Yokota, H., Suda, K., Kondo, T., Ogawa, M.
2. 発表標題 The acquisition of wh-questions by Japanese learners of English
3. 学会等名 International Conference on Bilingual Learning and Teaching (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ogawa, M., Shirahata, T., Suda, K., Kondo, T., Yokota, H.
2. 発表標題 Teaching boundedness and individuation as a distinction between count and mass nouns in English
3. 学会等名 BAAL2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Otaki, A. & Shirahata T.
2. 発表標題 The acquisition of ergative verbs by Japanese learners of English: Focusing on individual verb results
3. 学会等名 The Japan Second Language Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大瀧綾乃、白畑知彦
2. 発表標題 英語能格動詞の構造に関する明示的文法指導の効果
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 白畑知彦
2. 発表標題 ことばの不思議 私たちの「ことば」について色々と考えてみよう
3. 学会等名 三重県鈴鹿高等学校研修会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shirahata, T., Suda, K., Otaki, A., Kondo, T., Ogawa, M., Yokota, H.
2. 発表標題 animacy of subjects and influence on L2 acquisition: The case of Japanese learners of English
3. 学会等名 European SecondLanguage Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Suda, K., Kondo, T., Ogawa, M., Yokota, H., Yoshida, C., Shirahata, T.
2. 発表標題 The investigation of the feature inheritance hypothesis in second language acquisition
3. 学会等名 Generative Approaches to Language Acquisition (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 白畑知彦
2. 発表標題 第二言語習得研究、外国語学習研究、そして、外国語教授法とのインターフェイス
3. 学会等名 英語授業研究学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 白畑知彦
2. 発表標題 小学校英語教育の方向とこれからの展望
3. 学会等名 静岡大学教育学部同窓会志太支部（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 白畑知彦
2. 発表標題 言語研究の知見を応用した英語教授法の提案 - 代名詞の導入について
3. 学会等名 中部地区英語教育学会プロジェクト：言語・認知・学習理論を基盤とした英語指導の新しい展開 第2回研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 白畑知彦・須田孝司（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 246ページ
3. 書名 言語習得研究の応用可能性（第二言語習得研究モノグラフシリーズ3）	

1. 著者名 白畑知彦・須田孝司（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 220ページ
3. 書名 第二言語習得研究の波及効果（第二言語習得研究モノグラフシリーズ4）	

1. 著者名 白畑 知彦、須田 孝司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 201頁
3. 書名 語彙・形態素習得への新展開	

1. 著者名 Kondo, T. & Shirahata, T.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Mouton de Gruyter	5. 総ページ数 300頁
3. 書名 New Perspectives on the Development of Communicative and Related Competence in Foreign Language Education	

1. 著者名 Suda, K., Yokota, H., Kondo, T., Ogawa, M., Yoshida, C., Shirahata, T.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Cambridge Scholars Publishing	5. 総ページ数 240頁
3. 書名 Proceedings of GALA2017	

1. 著者名 小川睦美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 186頁 (pp.27 - 59)
3. 書名 「日本人英語学習者による指示表現と有生性の関連」 『第二言語習得研究モノグラフシリーズ1』	

1. 著者名 須田孝司	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 186頁 (pp.61-93)
3. 書名 初級・中級レベルの日本人英語学習者の文処理過程における言語情報の影響	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小川 睦美 (Ogawa Mutsumi) (40733796)	日本大学・商学部・講師 (32665)	
研究分担者	横田 秀樹 (Yokota Hideki) (50440590)	静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授 (23804)	
研究分担者	須田 孝司 (Suda Koji) (60390390)	静岡県立大学・国際関係学部・准教授 (23803)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	近藤 隆子 (Kondo Takako) (60448701)	静岡県立大学・国際関係学部・助教 (23803)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関